



Title	Gide-Mauriac 往復書簡について ( )
Author(s)	中島, 公子
Citation	明治大学教養論集, 151: 39-56
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/12110">http://hdl.handle.net/10291/12110</a>
Rights	
Issue Date	1982-02-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

# Gide-Mauriac 往復書簡について

## (Ⅱ)

中 島 公 子

1921年の末に発信された Gide から Mauriac への手紙(第五書簡)に Mauriac が返信を書いたのが翌る1922年の1月4日、これが《Le Baiser aux Lépreux (癩者への接吻 1922)》の校正終了と同時期であったことは前回に述べた。<sup>(1)</sup>それから20日を経て Paris の Mauriac (以下 M と略す)の住居に始めて Gide (以下 G と略す)の訪問がある。居間で執筆中の M を G は前ぶれもなしにふらりと訪れたのである。

「二年前だったら私を歓喜で動揺せしめたであろう訪問。<sup>(2)</sup>  
と彼は日記に書き記す。

この年の暮近く、Nouvelle Revue Française 誌は M の新作《*Fleuve de Feu* (火の河)》を連載し始める。Jacques Rivière, Raman Fernandez, Gide らの賞讃をうけ、M が小説の新時代を拓く旗手の一人として、しかも長いこと憧れてきた N.R.F 集団の一人として確固たる足取りで歩み出すのがこの1922年である。今回は、この年の両者の交信に限って小稿をまとめておきたい。

1922年1月24日の訪問に際して、G は一冊の薄い著書をたずさえていた。それを読んで聞かせ、M の反応を知りたい、というのが訪問の目的であった。本は《*Numquid et tu...?* (汝も亦)<sup>(3)</sup>》——1916年から1919年にかけての日記の抜粋で、キリスト教それも主として新約聖書の解釈に関する断想を収録したも

のである。これは著者名を秘してブルジュで限定70部のみ出版されたもので、Gide はまだ刷り上がって間もない一冊をたずさえてきたものと推察される。

そのときの会話の様子は、M の日記中に、ごく簡単に伝えられている。

「キリストに対する大きな、秘められた愛着。しかしその時期を過ぎ、いまの彼は、ロボット的な服従は断じて行なわない。そういう感想を私は彼(G)に伝えた。本を返す際、『彼はよく知り抜いているものを冒瀆する』というパスカルの言葉を添えた。また付け加えて、(彼はこれに同意したが)その熱情にかられていた時期にもし彼が秘跡を受けていたなら...とも言った。だがそれはいかにもそぞろしい言葉だ。この私が逆の手本ではないか? 罪とはわれわれが犯さずにいられないものだと、昨夜ジイドは私に語っていた。<sup>(4)</sup>...

『汝も亦...』は、先にも言ったように福音書に録されたキリストの言葉の解釈を問題にしている。その個所、問題点はさまざまであるが、全体を貫く思想をあえて要約するなら、次のように言えるのではあるまいか。すなわち、キリストが招く福音的生と、人間が現に生きて呼吸しているこの地上的生との間に分離を設けることに Gide は反対しているのである、と。そのことはとりわけ最終部において結論的に示される〈永遠の生 *la vie éternelle*〉の解釈に、よく現れている。*la vie éternelle* とは応々にして〈来世 *la vie future*〉の意に解釈されがちであるけれども、Gによればそれは根本的な誤りであり、キリストの言に耳を傾け、彼に従うものは、現在すでにして永遠の生を享け、永遠の生に入るのである。一方、〈罪 *le péché*〉とは、人間が犯さざるを得ないもの——地上的生と不可分のもの、との認識がGにはある(前掲のMの日記もこれに触れている)。人間が生において犯す罪は毎瞬間キリストを十字架に釘づけていると言ってもよい。しかもその十字架上の死こそ、人類の罪を、今より永遠に贖ったものなのである。個々の人間に課せられた課題は、以上のキリスト教の根本的神秘をどのように自己の生のうちに実現するか、であるが、そのためには人は〈新に生まれ〉なくてはならない。そして〈己が十字架をとりて彼に従わ〉なくてはならない。

その〈新生〉、キリストに従う〈永遠の生〉を、Gは蒼ざめた来世の浄福、禁欲や戒律遵守の報奨としての約束手形のようなものとしてではなく、歓喜に満ちた〈生〉の完成、比類なき充溢感をともなった〈生〉そのものと見做そうとする。〈己が十字架をとる〉というのも、代償としての来世を夢みて地上的不幸を甘受することではない。そこに魂を充足せしめる行為としての純粋な喜びがあることを見おとしてはならない、と言いたいようである。

「快樂は、魂と、また人が孤独で担うわねばならぬすべてのものの背をかがませ、十字架の荷は、魂をも、また御身<sup>(5)</sup>とともに担うすべてのものをも、その背を起こさせる。」

「…わが軛は易く、わが荷は軽し」<sup>(6)</sup>

もっとも、『汝も亦…』はそのような宗教論や人生論を展開しようとしたものではなく、あくまで日記的断想の収録にすぎず、そこには当時Gが通過した宗教意識の危機の反映がみられる。すなわち先にあげたような〈新生〉の喜びを、享受しつつある者としてではなく、むしろ得られるか否か、さらに自分自身求めるか否かの不安の中にある者として Gide は語っている。

「神よ、御身に仕えるのに適した状態で、またそれなしにはもはや幸福を味わえないにちがいないこの熱情に心を満たされて、明日も目ざめることを得しめたまえ。」<sup>(7)</sup>

「主よ、明日の朝、御身を必要とすることを得しめたまえ。」<sup>(8)</sup>

こうした宗教的不安の記録、また福音書の翻訳という微妙な問題にふれて教会集団の正統的見解に修正を求める側面を持ったこの小冊子を公表することにGがためらいを覚えていたであろうことは十分に推測できる。公表に先だつてMにこれを読ませたのは公表した場合の反応の一端を知りたかったからであろう。それはまた Massis との論争の経緯を通じ、また六回にわたる書簡のやりとりを通じて、作家であると同時に信仰者であろうとする立場を崩さない、しかもGに本質的理解を示したこの若年の友の判断に、Gが寄せた信頼の深さを物語っている。

## VII. Gide から Mauriac <sup>(9)</sup> へ

1922年 1月24日

*Je vous prête donc ce petit carnet...*

親しいモーリヤック、そういうわけでこの小冊子、お貸しします...私の信頼と共感の証として。これをあなたから取り上げるのは返して頂く場合だけであるように、お願いできますね。おわかり頂けると思うが、これは内密にお貸しするのです。

愛情をこめて あなたの

アンドレ・ジイド

これがGからMへの「第七書簡」だが、これで見ると彼はMを訪問してからいったん帰宅して、当の『汝も亦...』を手紙とともに郵送したものらしい。日記に録されたようなMの評言が適確と感じられたのであろう。

『汝も亦...』はほとんど人目にふれずに出版されたが、その一部は日本にいる Paul Claudel に贈られた。1924年の1月に Claudel はGにあてて長文の手紙を書き、

「いましがた、10年来とだえていた会話をあなたとの間に再開させてくれる『汝も亦...』の御本を頂戴しました。<sup>(10)</sup>」

と書き出して、この書物にうかがわれるGのキリスト教への接近を喜んだ。

「この十年、あなたの辿られた道は、ともあれ私のいる慎しい大道に近づいていたのだという気がします。<sup>(11)</sup>」

ここで些か本題から離れるが、『汝も亦...』をめぐるGと Claudel の間の出来事を知ることは、GとMとの関係に側面からある照明をあてることに役立つかもしれない。

1914年のこと、Gの『法王廳の抜穴 (Les Caves du Vatican)』に Claudel の『マリアへのお告げ (Annonce faite à Marie)』の一節が引用されたこと

をきっかけとして、両者の間にいさかいが生じた。〈ソチ (sotie)〉と名づけたこの作品が、教皇の人格への侮辱を含んでいるのではないかとおそれていた Claudel は、作品が出るに及んで、その中に暗示された Gide 自身の倒錯的性愛を含む背徳嗜好をきわめて重大視し、そこに Gide の魂の危険を見てとって、激しい難詰の手紙を G に書き送った——「わからないのですか、あなたは破滅しますよ。あなたも、まわりにいる人たちも。」<sup>(12)</sup> 全力を尽して G を改心させようとする Claudel と、表面はしなやかだが、己れの側に非を認める気持など毛筋もない G との間に緊張した書簡のやりとりが交わされ、「お別れしましょう。これからはどれほど私を虐げられてもかまいません、私はあなたの思いのままです」という G の言葉と、「あなたが嗤うその神が、あなたとともにいてくださるように」<sup>(13)</sup> という Claudel の言葉に象徴されるような決裂に至る。<sup>(14)</sup> むろんその後も儀礼的なやりとりは交わされるが、1899年に始まるこの両者の存在を賭しての精神的対話はこのとき終ると見てよいのである。

『汝も亦...』によって Claudel の胸のうちに芽生えたのは、ふたたび G とかつてのような対話を交わせるようになれるのではないか、という希望であった。

「主よ、私は子供のようにあなたの御許にまいります。そうなれとお望みになる子供のように。あなたにすべてをお委せした者なる子供のように。私の傲りとなり、あなたの御許で私の恥となるようなすべてのものを断念します。心の声に耳傾け、心をあなたに従わせます」<sup>(15)</sup>

といった G の言葉が、まさにその決裂の時期、自分の知らぬところで発せられていたのだと知った Claudel の喜びは大きかった。また限定版の一部をはるばる極東に送った Gide の方にも、頑なに閉ざした心の一部をあけて見せることによって、ある和解を期待する気持がはたっていたのかもしれない。

実際のところ Claudel は半年ほどこれに先立って、『ドストエフスキー論 (Dostoievsky)』<sup>(16)</sup> を賞讃した手紙を G に送っており、断絶はこれによってすでに破られているのだが、Claudel の書簡は『汝も亦...』の与えたショックを率直に語って、そこにうかがわれる G のキリスト希求を彼がいかに感銘深く受け

とったかを伝えている。

これらにくらべると、G からこれを読み聞かされたときの Mauriac の感想はいま少し冷静なものであったように思われる。遠隔地の Claudel が秘密の扉をあけられたショックも手伝って、1914年以來のGの歩みをキリスト教への接近といわずに思いなしているのに対し、MはあくまでこれをGの思想遍歴の一局面を示すにすぎないものと受け取っている。しかも、それは過去に属するものであって、「いまの彼は断じてロボット的服従はしない」のである。Mühlfeld 夫人のサロンでキリストと福音書の熱烈な擁護論をしたGの姿に深い感銘をうけたMもまた、Claudel と同じような希望——すなわちGがいつか恩寵の光に浴するという希望を生涯にわたって抱きつづけるが、Claudel のような正義の強引さはMにはない。距離のもたらす錯覚からも免がれ、この若きカトリック作家はGを等身大にとらえている。

Claudel はその後（1925年）帰国してすぐGと会う<sup>(17)</sup>。Gは彼のいわゆる宗教的不安がすでに「終わった」こと、いまや一種の〈至福（félicité）〉——Claudel が期待したのとは正反対の——の境地にあることをClaudel に告げた。

「彼の性格のゲーテ的側面がキリスト者的側面に勝った。」<sup>(18)</sup>

Claudel はこの会見ののち、Gからの手紙の余白にそう書きこんでイリュージョンを訂正している。

1922年、Mに『汝も亦...』を読ませたGの中には、何が働いていたのであろうか、彼を去ったカトリックの朋友たちの反応を、Mを通して知ろうとする気持がそこにはあったのかもしれない。Massis の攻撃が思いがけない副産物として与えた小さな味方——1922年のGにとってMとはおそらくそのような存在であったろう。だがこのときカトリック思想界と和解する意図がGのなかにどの程度あったかは、疑問である。いずれにせよ、1928年にならなければ、Mauriac という名前はGの日記中に姿を現わさず、1922年当時のGがこの若い友人に期待したものを正確に知る手がかりもない。

## VIII. Mauriac から Gide へ<sup>(19)</sup>

1922年2月

*Aucun de ces gens-là ne sait lire...*

親しい友よ、Ch. 夫人の熱情の教化善導的なことといたら！ こういったものは皆、無に等しいものです。しかしこういうことすべてが、お書きになるものに役立つこともありましょう。どれほど深くご自身の内部に下って行かれたとしても、なお一層先へ進まれるべきでありましょうし、こうした憎しみそのものをも、あなたは糧となさるでしょう。温かみがないというあの攻撃には驚きました。悩んでいないというあの非難にも！ あの連中は一人として読むすべを知りませんね...

## IX. Gide から Mauriac へ<sup>(20)</sup>

1922年2月

*Votre article me console...*

あなたの書評は〈世評〉の妄言や無理解から私を慰めてくれます（もっとも、それは私が世評を気にしているとしての話ですが）。至急に休養をとる必要があってしばらくパリを離れますが、その前に心からの感謝をくり返しておきたい...

以上の二書簡は、Massis の攻撃の余波にかかわるものである。第八書簡の Ch. 夫人の批評というのは Henriette Charasson が1922年2月1日付の *Les Lettres* 誌に書いた、《*Monsieur André Gide*》。Morton の註によれば完全に Massis の側に立ったもの、ということである。

「アンドレ・ジイドのもとにドラマなど存在しない、それに苦悩するどころ



か、それをたのしんでいるのだから。<sup>(21)</sup>」

従って第九書簡でGの言う「あなたの書評」とは『マシスへの回答』である。小さくとも味方は貴重な存在であったにちがいない。〈気にしていない〉と言いながら、Gはかなり Massis の非難を気にしている。

## X. Mauriac から Gide へ<sup>(22)</sup>

1922年 6月25日

*je voudrais être sûr que mon article ne vous a pas blessé.*

親しい友よ、私の書いたものがあなたを傷つけなかったという確信が欲しいのです。私は尊敬と思慕——それと信仰の板ばさみになっていました。敵意を持つ仲間に腹を探られていましたから。急激な方向転換めいたことは何も書けなかったのです。従って、思っていることのもっとも厳しい面を開陳したわけです。『汝も亦...』の作者ならきっと理解してくださったでしょう。あなたの場合重大なのは、神の原典を〈逸脱〉すること——これだけです。

もし苦痛をお与えしましたなら、どうぞお赦してください。そして親愛なる師にして友よ、敬意をこめた変らぬ賞讃と愛情をお信じてください。

フランソワ・モーリヤック

〔追伸〕

安心させてくださいますね？

第十書簡は次の第十一書簡とともに1922年6月に Vieux-Colombier 座によって上演されたGの戯曲《*Saül* (サユール王)<sup>(22)</sup>》をめぐってのもので、Mは6月24日付の *Revue hebdomadaire* でこれを批評した。その劇評を作者がどう思ったか、たずねた手紙である。

『サユール王』は Jacques Copeau が演出をかねて Saül に扮し、Louis Jouvet が大司祭の役で共演したが、〈不入り〉で新聞の評もかんばしくなか

ったという。<sup>(23)</sup>Mの批評は劇評というより作品評、むしろ解説に近いもので、手紙から推察されるとおり、むしろGに対して好意的なものである。周囲に気がねして厳しい意見を書いたというふうに言っているが、本心はもっと「ジイド寄り」であることをわかって欲しい、と訴えているわけである。

この戯曲は旧約聖書にあるダヴィデを愛し、ダヴィデに滅ぼされるサユール王の悲劇をG流に解釈したものであるが、中心となっている主題はサユール—ダヴィデ—ヨナタンの三者の homosexual な関係にあり、ここが一般の道徳観に抵触したであろうことは十分に考えられる。Mはこの問題に直接ふれていない。「作者はここで悪魔憑きの一症例を描こうとのみつとめている<sup>(23)</sup>」として、サユールの墮落にGが外在的な（悪魔という）原因をも設定している点に注意をうながして、遠回しな援護を試みている。

Mが強調しているのは、一にはこの戯曲の詩文性、高い芸術性であり、いくつかの文章を引用して、その Racine 的詩語の凝縮した美しさを挙げ、Copeau の演技はこれを十分に活かしていない、と難じている。

二には、サユールの道徳的失墜・墮落を描くことが背徳の称揚につながるといった短絡的な見方を、この戯曲についてとることの誤りを指摘している。

「ジイドが我々の抵抗を望んでいること、また彼自身救いの言を信じていることを私は知っている<sup>(25)</sup>」

以上二つの論点はいずれもMが『マシスへの回答』で展開させたジイド観を、具体的に発展させたものと言うことができる。すぐれたフランス語を書くことは、道徳的目的に奉仕する凡庸なフランス語を書くこと以上に、〈効用的〉であるとする文学の自律性の擁護も、自我の内奥に巢食う悪に照明をあてること自体、悪からの脱出・救いへの希求に一つの可能性を示唆するものであるとの認識も、『マシスへの回答』におけるジイド擁護の主要な根拠だったものである。いかにもMらしい論旨の進め方であって、彼自身の文学観、創作者としての立場を透影したものであると思える。

「現代の最も純粋な作家のもつ知識、音楽的な一文を毒をもってふくれ上<sup>(26)</sup>がらせるこの知識は、我々を戦慄せしめ、またそれによって我々を救う。」

さて、これに対してG自身は、Mの批評がGの意図をよく理解したものであることに、深い満足を示した。それが第十一書簡である。

## XI. Gide から Mauriac <sup>(27)</sup> へ

1922年7月1日

*...un peu moins timoré, l'eussiez-vous pu meilleur encore.*

こうしている間に私の手紙を受け取り、すでにそれによって安心なさっているでしょう。あなたの批評はいまなお『サユール王』について語られたもののうちもっとも怜悯な、もっとも良いものです。おそらくいまいし大胆であったら、さらによくすることがおできになったでしょう。たしかに私は今までこの戯曲以上に道徳的なものを書いたことはありません。すなわちこれ以上に戒告的 (monitoire) なものを。『地の糧』から出るとき、私はもはや抵抗しないことの危険性を理解して、〈穴倉〉のように叩き毀されたこの老王の亡霊を立たせたのでした。あなたはきっとそのことを指摘なさったでしょうし、私たち二人の道の交わる地点をお示しになれたでしょう。なぜといって、実際、私の画いたものの中に何がしかの教訓を見出すことは不可能なのではないでしょうか。また私がサユールの墮落を模範にせよといっているなどと、人は本気で言い張るつもりですかね。

聖書の悪意的解釈といわれる点については... 1° 私はサユール王の物語がこれ以外に説明のつくものとは考えられません——そして私が少々あちこちで音調を上げているとしても——雅歌の敬虔な解釈 (例えば) だとて、まったくちがったふうに音調を上げているのではありませんか。それからポシェエも、あちこちで。<sup>(28)</sup> 2° 私は聖書を、ギリシャ神話と同じく (それ以上に)、汲めども尽きぬ源泉のようなものとしているのです、またたえず人々の英知が赴く新たな方向から提示される各解釈によって、豊かにされて行ってよいものと考えています。彼らの最初の答にしがみつかないのは、たえず彼

らにたずねるためなのです。

ではまた、

アンドレ・ジイド

すなわちGは、この作品を〈道徳的陰画〉とするMの視点を完全に作者の意図を汲むものとし、執筆当時、『地の糧』で開放した感覚的快楽の culte の行きつく一つの極として、サユール王の墮落を示そうと考えていたことを明らかにしている。「もはや抵抗しないことの危険性」という言葉は、Mの批評中にあった「ジイドは我々の抵抗を望んでいる」という言葉と対応して、Gが悪への傾きにただ漫然と従うことを説いているのではないことを示すものである。

第十、第十一書簡のいま一つ重要な点に、聖書の自由解釈についての両者の立場のちがいが、そこから引き出されるMの小さな反発があげられる。これは前回もふれたように、G=M間の対話の一つのテーマとなっているものだが、この点については少し先へ行ってまとめて考察したい。

## XII. Mauriac から Gide へ <sup>(29)</sup>

1922年12月11日

*Je suis heureux d'écrire à la N.r.f.*

おすずめに従って『ある少女の告白<sup>(30)</sup>』を読み返しました——そしてこれらの頁が私の視野にはいっていなかったことを残念に思います……できるだけ早く発表できるようにと急いで書いたあの短文は、ある漠然とした記憶をたよりにしたもので、それをあなにお詫びしなくてはなりません。つまりいまにして思い出せば、ブルーストの作品を、迷うことが愉しい森におたとえになったのはあなたでした。『スワン家の方へ』を浸している永遠性の雰囲気を買ってブルーストがふたたび見出した、この『見出された時』には、期待できるも

のが多く残されています。『花咲ける乙女ら』以降、社交界人士や召使いたちは、彼ら特有の品位のなさを作者に押しつけたように思われます。研究する人間に及ぼす、研究対象の動物の奇妙な影響がそこにはあります……

親愛なる師にして友よ、おたよりの最後の数行は言いようもないほど私を打ちました。<sup>(31)</sup> キュヴェルヴィルがもしそれほど遠くなくて、次の汽車を待つ間に着くくらいのものなら、そしてこの十二月の田舎で、お話をうかがうほかにすることもないのでしたら、お宅の炉端へおしゃべりに行くのはさぞ楽しいことでしょうに。

『火の河』はあちこちの面で気に入って頂けることと存じます。おそらく結末はお好みにならないかも……しかしどのように終わらよいのでしょう？ 内部で何一つ妥協させられずにいる我々——我々の作品は、神が我々を委ねられ、しかも神から望まれたものでもある情熱と、神との間の、この出口なき闘争、内心のこの戦いの絵図でしかあり得ません。

**N. r. f** に執筆できて幸せです… 15年を経て、顔みしりだった少年期のころと変らないリヴィエール——人生が疵をつけなかったダイヤモンド——を、ふたたび見出しています。

マルセル・ブルーストは1922年11月18日に世を去った。Gに劣らず作家 Mauriac の誕生に大きな力を及ぼしたこの大作家とMとの出会いについては、また別の機会に考察したい。<sup>(32)</sup>ここでは、書簡中のMの文章が12月2日付の *Revue hebdomadaire* 誌《ブルースト追悼号》に載ったものであることを付記するとどめる。末尾に近いところでMはブルーストの作品を「神秘的な、しかも知悉した筆で描かれた魅惑の森」にたとえ、そこに「迷いこむことを好む」者は少数の選ばれた者であろう、と語っているが、この比喩は1921年の N. R. F. 3-4月号の《マルセル・ブルーストについて (*A propos de Marcel Proust*)》の中でGが使ったものだった。<sup>(34)</sup> Mの一文はその後《マルセル・ブルーストの墓前で (*Sur la tombe de Marcel Proust*)》と題して、N. R. F. のブルースト頌特集号に収録された。<sup>(35)</sup>

『火の河』(*Le Fleuve de feu*)は1922年12月1日、1923年2月1日、同3月1日発行の N. R. F に連載された。<sup>(36)</sup>この掲載をめぐって、この年 M と G の間には瀕繁な交渉があったであろうことが推測される。多年の念願をはたして N. R. F に加わることができたのは、G の推輓によるものであったが、同時に編集長 Jacques Rivière もそれを望んだからである。M と同郷の俊才 Rivière との関係は Lacouture の <sup>(37)</sup>《*François Mauriac*》に詳しく、それ自体興味を唆られるが、いまそのことにふれる余裕がない。 (続)

#### 引用・参考文献

- ① Cahier d'André Gide 2: *Correspondance André Gide-François Mauriac* 1912-1950, établie, présentée et annotée par Jacqueline Morton, Paris, Gallimard, 1971.
- ② Le tome IV des Œuvres complètes de François Mauriac: *Journal d'un homme de trente ans*. Paris, Fayard, 1952.
- ③ André Gide: *Numquid et tu...*(Journal 1889-1931, Bibl., de la Pléiad, pp. 587-606)
- ④ Paul Claudel et André Gide: *Correspondance* 1899-1926, préface et note par Robert Malle. Gallimard, 1949. (C. C-G と略す)
- ⑤ André Gide: *Saül*, Mercure de France, 1903。『サユウル』(岸田国土・宮崎嶺雄訳, ジイド全集第十巻, 新潮社。1951)
- ⑥ *Chronologie* de Mauriac, établie par Jacques Petit. (1<sup>er</sup> volume des Œuvres complètes, Bibl., de la Pléiade, 1978.)

#### 註

- (1) 「明治大学教養論集」通巻 145 号 p. 60
- (2) Visite qui, il y a deux ans, m' eût bouleversé de joie. ② p. 266
- (3) ③参照
- (4) Grande et secrète tendresse pour le Christ. Mais quand elle est passée, il n'incline jamais l'automate. Je le lui ai dit. Je lui ai appliqué, en le retournant, un mot de Pascal: «Il blasphème ce qu'il connaît.» J'ai ajouté (et il m'a approuvé) que si, à cette minute de ferveur, il avait eu les sacrements... Mais quel mensonge! et ne suis-je pas la preuve du contraire? Le péché, me disait Gide hier soir, c'est ce que nous ne pouvons pas ne pas faire. ② p. 266

- (5) C'est le plaisir qui courbe l'âme et tout ce qu'on est seul à porter ; le fardeau de la croix la redresse, et tout ce que l'on porte *avec Vous*.  
③ p. 604
- (6) ... mon joug est aisé, et mon fardeau léger. ③ p. 604
- (7) Mon Dieu, faites que demain matin je m'éveille dispos pour vous servir et le cœur plein de ce zèle sans lequel je sais bien que je ne connaîtrai plus le bonheur. ③ p. 602
- (8) Seigneur, donnez-moi d'avoir besoin de Vous demain matin. ③ p. 602

(9)

VIII.—GIDE A MAURIAC

24 jan [vier] 19 [22]

Mon cher Mauriac

Je vous prête donc ce petit carnet ... en témoignage de ma confiance et de ma sympathie. Puis-je vous demander de ne vous en dessaisir que pour me le rendre. Vous comprendrez, n'est-ce pas, que c'est un prêt confidentiel.

Bien affectueusement votre

André Gide. ① p. 67

- (10) Mon cher Gide, je viens de recevoir votre livre *Numquid et tu* ... qui me permet de reprendre avec vous la conversation interrompue depuis dix ans... C C-M. p. 240
- (11) Il me semble qu'en ces dix années votre chemin s'est tout de même rapproché de l'humble grand'route que je suis. C. C-G p. 140.
- (12) Ne voyez-vous pas que vous vous perdez, vous et ceux qui vous entourent de plus près? C. C-G p. 217
- (13) Adieu. A présent vous pouvez me faire beaucoup de mal et je suis à votre merci. C. C-G. p. 219
- (14) Et que Dieu soit avec vous dont vous vous riez. C. C-G p. 225
- (15) Seigneur, je viens à vous comme un enfant ; comme l'enfant que vous voulez que je devienne, comme l'enfant que devient celui qui s'abandonne à vous. Je résigne tout ce qui faisait mon orgueil et qui, près de vous, ferait ma honte. J'écoute et vous soumetts mon cœur. ③ p. 588
- (16) C. C-G. p. 238
- (17) C. C-G. p. 242
- (18) Le côté *gœthien* de son caractère l'a emporté sur le côté chrétien.

(19)

VIII.—MAURIAC A GIDE

Février 1922.

Mon cher ami

Le zèle de Madame Ch. est fort édifiant ! Tout cela n'est rien ; Tout cela pourtant peut servir à votre œuvre : Aussi loin que vous soyez descendu en vous-même, il faudra pénétrer plus avant et même de cette haine vous ferez votre nourriture. Ah ! cette accusation de sécheresse ! Ce reproche de ne pas souffrir ! Aucun de ces gens-là ne sait lire...

Veillez croire, mon cher maître, à ma respectueuse affection.

F. Mauriac. ① p. 67

(20)

IX.—GIDE A MAURIAC

Dimanche février 1922.

Mon cher Mauriac

Votre article me console(raît, si je m'en affectais) des sottises et des incompréhensions de la presse. Je quitte Paris dans quelques heures ; urgent besoin de repos—mais pas avant de vous avoir redit toute ma gratitude affectueuse.

André Gide. ① p. 68

(21) <Il n'y a point *drame* chez André Gide, puisqu'au contraire, il n'en souffre pas *mais en jouit*.> Notes sur la *Correspondance G-M*, ① p. 220

(22)

X.—MAURIAC A GIDE

Vémars (S & O) 25 juin 1922.

Mon cher ami je voudrais être sûr que mon article ne vous a pas blessé : j'étais pris entre mon admiration, mon affection—et ma foi : des confrères malveillants m'épiaient. Il ne fallait rien écrire qui pût ressembler à un revirement. Ainsi ai-je dit tout ce que je pensais de plus sévère. L'auteur de *Numquid et tu*, m'aura compris n'est-ce pas ? Il me semble qu'il n'y a que cela de grave dans votre cas—ce génie



de *dévier* le texte de Dieu.

Si je vous ai fait de la peine, je vous en demande pardon et vous assure, mon cher maître et ami de ma respectueuse et fidèle admiration—de mon attachement.

François Mauriac. ① p. 68

Voudriez-vous me rassurer ?

(22) ⑤ 参照

(23) Notes sur la *Correspondance G-M.* ① p. 221

(24) François Mauriac, «Saul», *La Revue hebdomadaire*, 24 juin 1922, pp. 502-504. ① p. 125

(25) ① p. 127

(26) *ibid*

(27)

#### XI.—GIDE A MAURIAc

Porquerolles [1<sup>er</sup> juillet 1922].

Mon cher Mauriac,

Vous aurez entre-temps reçu ma lettre, qui déjà vous aura rassuré. Votre article reste ce qu'on a dit de plus intelligent et de mieux sur Saul ; sans doute, un peu moins timoré, l'eussiez-vous pu meilleur encore. Certainement je n'ai jamais écrit rien de plus *moral* que cette pièce ; je veux dire : de plus monitoire. Au sortir des *Nourritures terrestres*, je compris le danger de ne plus se défendre et dressai le spectre de ce vieux roi démantelé comme un «Cave!»—Peut-être auriez-vous pu montrer cela—indiquer ce carrefour de nos deux routes. Car ne pensez-vous pas, au fond, qu'on puisse trouver quelque enseignement dans ma peinture ? et prétend-on sérieusement que je propose en exemple la déchéance de Saul ?

Pour ce que vous dites de mes interprétations tendancieuses des textes saints... 1<sup>o</sup> Je ne pense pas que l'histoire de Saul se puisse expliquer autrement—et quand je forcerais un peu la note, de-ci de-là—les interprétations pieuses du Cantique des cantiques (par exemple) ne la forcent-elles pas bien autrement... et Bossuet, *passim* (voir méditations sur «N'êteignez pas le lumignon fumant»)—entre autres, etc., etc. ② 2<sup>o</sup> Je tiens les livres saints, tout comme la mythologie grecque (et plus encore) d'une ressource inépuisable, infinie, et appelés à s'enrichir sans cesse de chaque interprétation qu'une nouvelle

orientation des esprits nous propose. C'est pour ne pas cesser de les interroger que je ne m'en tiens pas à leur première réponse.

Au revoir ; croyez à mes sentiments bien affectueux.

André Gide. ① p. 69

(28) (27)—a

(29)

## XII.—MAURIAC A GIDE

11 décembre 1922.

Mon cher maitre et ami

J'ai relu, sur votre conseil, *la confession d'une jeune fille*—Et regrette que ces pages m'aient échappé... cet article, écrit hâtivement, pour qu'il pût paraître assez tôt bénéficie d'une réminiscence dont je m'excuse auprès de vous : car c'est vous, je m'en souviens à présent, qui avez comparé à une forêt où il est délicieux de se perdre, l'œuvre de Proust. Il nous reste d'espérer beaucoup de ce « Temps retrouvé » où Proust a retrouvé peut-être l'atmosphère d'éternité qui baigne le « côté de chez Swann ». Il semble que les gens du monde et les domestiques lui aient imposé, après *les jeunes filles en fleur*, leur propre déchéance, il y a là une étrange influence de la bête étudiée sur l'homme qui étudie...

Mon cher Maitre et ami, les dernières lignes de votre lettre m'ont touché à un point que je ne saurais dire. Si Cuverville n'était pas si loin et pouvait être atteint entre deux trains il me serait doux d'aller causer au coin de votre feu—et dans cette campagne de décembre de ne rien faire que vous écouter.

Il me semble que *le fleuve de Feu* pourra vous plaire par certains côtés. Sans doute n'en aimerez-vous pas la fin... Mais comment finir ? et nous qui ne savons rien concilier en nous, notre œuvre ne saurait être que l'image de cette lutte sans issue, de ce débat dans notre cœur, entre Dieu et la passion à quoi Dieu nous soumet et qui pourtant est voulue de Lui.

Je suis heureux d'écrire à la N.r.f. ...après quinze ans, je retrouve un Rivière pareil à l'adolescent entrevu—c'est un diamant que la vie n'a pas rayé.

- (30) Marcel Proust: *La confession d'une jeune fille*. 《Les Plaisirs et les jours》中に収められ1896年出版。Calmann-Lévy 社。
- (31) この手紙は発見されなかった。① p. 221
- (32) François Mauriac 《*Du côté de chez Proust*》édition de la Table Ronde. 1947 参照
- (33) Notes sur la *Correspondance G-M*. ① pp. 222-223.
- (34) *ibid.*
- (35) *ibid.* p. 222.
- (36) *ibid.* p. 223.
- (37) Jean Lacouture: *François Mauriac*. Seuil, 1980.